

ふ
た
り

美
知
代

到頭戸籍の運びも済みました。

今朝奥様が——ではない新母様が、わざわざ御自身區役所へ出掛けて下さつて、一切の事すつかり落着いて了りました。

今日からは愈々杉山節衛、最う野村節衛ではない、大威張りで杉山節衛、大恩ある先生を交様と呼び奉り、其養女として、やがて勝利の新生活に入る事が出来るのかと思ふと、何とも云へぬ嬉しい、嬉しい氣がして堪りません。

考へても頂戴、まる二年間のたゞかひ、随分苦しい思ひをしぬいて、やつとかちえた此の喜び、そのえさん、あなたでなくてはお察し下さる事も出来ません。

杉山節衛、杉山ふしる。

幾度となく書いて見れば、われながら字うつりの好い、いつか雑誌で本版にされた本姓の野村節衛よりも

餘程書きよくて、それで居て、下手な字もさして目だ、ぬやうなど、然うした事まで獨りでは、えんで、嬉れしがつて居ますのよ。

けれ共、最う永久に野村節衛ではなく、野村家の娘ではない、と思ふと多少の哀愁と云つたやうな感じがないでもありません。そのえさん、今更ながら解らないのは人の世の運命です。

三十九年の冬、頑固な父様に無理矢理故郷へ連れられた時の悲しさ、丁度母様の手傳ひ、旁御逗留中のあなたと二人、裏の六疊に立籠つて、明暮一つのお炬燵に差向ひの、あなたは針をなさるし、私は讀書したり筆を嗜んだり、引切りなく降り積る雪をながめては、あゝこれが終の住家が雪五尺と、一茶の名句を吟みて、さめたく泣き出すかと思へば、何でもない事を難かしく、腹を立てたり八つ當りして、随分お困りなすつたわねえ、でもあなたは私と違つて、同じいところでありながら、まことに柔順な優しい御性質、ついに一度悪いお顔もなさらず、一年の上も御一緒に居るうちには、私のもだえもほゞお察しになつて、何かとやさしくおいたはり下すつて、私はお陰でどんなに助かつたでせう。

而して彼のお彼岸の中日に、二人限りでお墓詣りの歸るさ、お城山の麓に枯草を折敷いて、いろ／＼こみ入つた事情を打明けて、胸のもだえを語り合つた末、是非今一度出京し度いと、思ひ詰めた私の言葉をお聞きなすつた時、其時からそのえさん、黒眼勝ちなあなたのお眼は、一層やさしいうるみを添えて、私に出来る事なら何でもして、是非強み通りにしてあげ度い、伯父様伯母様から後に何と叱られたつて、それは濟まないけれ共、それも一時、又何とでもお詫びの出来ること、遠慮無く何でも相談して下さいといと、手を執つて

お泣きなすつた其ころ、一生忘れはおきません。

それから叔父様の御一週忌と云ふので、あなたが一先づ御家へお歸りなさるのを好い幸に、夏やすみ中に今一度、出京の事を願つて見て、それで許されなかつたら亂暴だけれ共仕方がない、海水浴が湯治を利用して、最後の手段に出る事となり、例の山吹織の帯だの矢飛白の袴だの、當座の必需品と云つたものばかり、あなたの行李にそつと忍ばせて頂き、若しお家へ歸つて叔母様に見つかつてきかれた時には、仕方がない、節衛さんから縫ひ直しをたのまれましたつて、然う言つてごまかす外はないと、随分ひどい手筈までしましたつて、六月に富貴子姉様、八月に貞子姉様と、二人まで嫂様にゆかれ、重ね／＼の御不幸に、看病のお疲れやら何やら、やつれ切つた母様のお顔を見ては、流石の私も然う然う自分勝手ばかり云つては居られず、つい其儘になつて、今度は自分が不全チナス、熱の中でも絶へず出京の事を云ひ續けて居た相で、先生の御盡方などの結果、終に出京の事になりました。

野村家から杉山家へ籍を移された代り、今後は楽しい新生活に入る事が出来るので、又文學に對する私の責任、それもなほざりならん事になりました。

兎に角、兎に角喜んで下さい。其枝さん、私近いうちに出京しますから、是非其前にお目に掛り度い。あなたにも此頃御煩悶があまりなさる筈、併しそれはあなたのおこころ一つで如何にでもなる事、何處までも強くお通していらつしやい、義理だの何だの、くだらない事にまけては一生の損です。まづと我儘におなりなさいな。

私の手紙に引代へて、何と云ふ悲しいお手紙でせう、

そのえさん私は泣きました。何と云ふおやさしいお心、我儘者の私なんぞ、いつそお恥かしい位、意生地がないと笑つて呉れるなど、如何して、笑ふ處ではない、つくづく恥かしくもなりました。これはねえ、以前あなたが坂田家から御離縁におなりの時は、御夫婦の仲に愛情が無くなつたと云ふでもないのに、兎角始と實家との折合が悪いばかりで、あゝした事になつたと云ふ、それが如何にしても齒がゆい様し思はれ、随分思ひ切つた罵倒もしましたが、今度の御決心、只涙の外言葉もありません。

義理におまけなさるな、今少し強く我儘な態度をおとりなさいと、斯うした事を申上げて居りながら、私でさへ、我慢して犠牲になつて下されば……と、然うした事を思ふので、何と云ふ身勝手、そのえさん、あなたこそ笑つて下さい。

あなたなら、翁屋を着負つて立つて、十分の働きの出来る、とこれは誰も誰も皆信じて居るのです、けれども兄と云へば彼様したしまりの無い、おまけに太郎と云ひ二郎と云ひ二人まで繼兄があつて、容姿なり氣質なり何處に一つの中分も無く、降る程縁談の有らうと云ふ若いそのえさんを犠牲にとは、如何あつても云ひ出し難い、殊に叔父様御死去以来、雅男さんの學費など、然うした關係もあり、僅かな事を思に着せるやうに思はれるも嫌、さらばと云つて、他に人も無いので、父様も母様もまことに困り切つて居るのです。

斯うした場合、あなたが立つて下されば、それは最う、此上も無い幸福なのですけれど……そのえさん悲しいわねえ。

「翁屋は我が母の世でたる家、不來者にて、昔徳御失傳遊ばし候日、必ず有之べく在せられ、恐ろしき様にも思はれ候へ共、伯父様伯母様の御言葉ありがたく、幼い二人のため、出来るだけを盡し見ばやと思ふのに候へど、此の御手紙を拜見して、そのえさん、我儘な節衛は、たゞ／＼恥入るの外ありません。

あゝ犠牲、美しき犠牲！

斯う申しても、これは決して何時もと同じ心で云つて居るのではない、眞實心から感じて申すので、キリスト教のそれとは非常に違ふ位私にだつて解つて居ます。

解つて居るから尙更悲しいではありませんか、そのえさん、彼の裏の六疊のお炬燵に當つて、嫌がるあなたの前に、無理矢理太陽の時文を讀んで、しまひには長谷川天溪の愛讀者にして丁つて、よく二人で烈しい近代思想に泣いたり、慄へたりしましたわね。

其あなたが犠牲——兎に角犠牲の生涯をお送りなさる、私は今日迄我儘一片で通して來た過去をかへりみ泣き出したいやうな變な氣がして堪りません。

あゝつまり人生は如何ならうと云ふのでせう。

(完)